

三重の昔話ゆかりの地

三重県内の各地では、多彩な昔話が語り継がれています。これらの物語は懐かしいと同時に、私たちの心を打ちます。今回は、そんな昔話ゆかりの地を6か所ご紹介します。

*各昔話ゆかりの地に関連する法要やイベントなどは、実施期間・受け入れ人数・受け入れ方法などに違いがあり、状況に応じて延期・休止する場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材文：中村真由美 中村元美 堀口裕世
撮影：梅川紀彦 中野耕司 尾之内孝昭 中村元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

助けられた猿と村人が協力して、建立をお手伝い

鳴谷山 聖寶寺

猿の恩返し

【いなへ市藤原町】



鳴谷神社の猿

藤原岳の麓に鎮座する鳴谷神社を訪ねると、珍しい光景に出合います。参拝者を出迎えるのは狛犬ではなく、猿で、

縁起のよいものとされているのです。鳴谷神社のさらに奥には、猿にまつわる昔話が伝わる聖寶寺がたまたみまします。

しかも新旧2対が並んでいるのです。昔むした方は大正時代、新しい方は平成29(2017)年に建立されました。同神社では、猿を「神猿」と呼び、それが魔が去る〴〵勝る〴〵優る〴〵賢る〴〵に通ずることから、

話とは、平安時代のある日のこと、山に囲まれた美しい村を訪れた一人のお坊さんが、畏にかかって苦しむ猿を助けたことに始まります。喜んだ猿は、何度も礼を言っ、山へと帰っていきます。続いてお坊さんは、やはり病に苦しむ村人たちに会います。村人たちを救うために祈ったところ、観音様が現れ、滝の近くに寺を建て、観音様を祀れば、村人の病は治ると教わります。そこで、お坊さんは一人で寺を建て始めます。すると、助けられた猿が仲間を連れてきて、手伝うように。やがて、その様子に気付いた村人たちも加わり、立派な観音堂が完成。村に平和が訪れたというものです。

この昔話に登場する観音堂とは、聖寶

寺のことで、お坊さんとは天台宗開祖の伝教大師(最澄)だと伝わります。「藤原町民話研究会(藤井樹巳代表)は、この話を子どもたちに語り継ぎたいと、1冊の絵本にまとめ

「地域の人は『山から猿が下りてくると雪が降る』といひますね」と、今も猿が身近な存在であることを教えてくれるの



「さるのおんがえし」紙芝居の一場面

は「さるのおんがえし」。ほのぼのとしたタッチのイラストが、心温まる物語に花を添えています。



「さるのおんがえし」の一場面

は、聖寶寺住職の中井泰山さん。保育園児に「さるのおんがえし」を定期的に読み聞かせをするという住職は、猿(動物)と人間の関係について考えるきっかけ

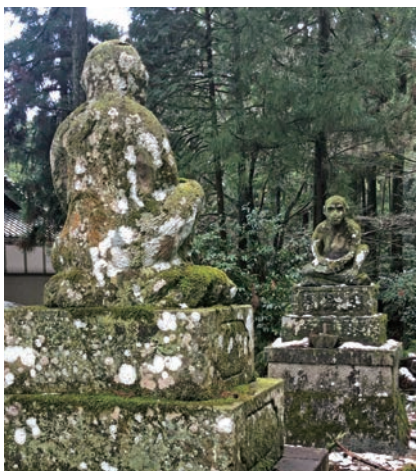
けにしてほしいと話します。現在、農作物などを荒らす厄介者とされていますが、この昔話のように良好な関係になればと、願っているのです。紅葉の名所として名高い聖寶寺は、近年では動物供養の寺としても知られ、長年大切に育ててきたペットの供養を依頼する人々が訪れます。今日も同寺では、人間同様に動物法要を執り行う住職の姿が見られることでしょう。

お問い合わせ

鳴谷山 聖寶寺
TEL 0594-46-8101



聖寶寺の守護神・鳴谷神社



大正時代に建てられた猿



平安時代作庭と伝わる聖寶寺の庭園

哀れな小女良の話と、小女良稲荷

龍谷山 廣禪寺

小女良狐

【伊賀市上野徳居町】



小女良稲荷の祠内



廣禪寺本堂

伊賀上野の城下町の一面にある廣禪寺は、県指定文化財の「木造聖観音菩薩立像」や「廣禪寺輪藏」を有する名刹として知られます。なお、「輪藏」とは、一切経を収納するための書架のこと、これを回転するだけで経典を読むのと同じ御利益が得られると信じられています。

ところで、同寺の歴史は波乱に満ちたものでした。開山は応永21(1414)年で、当初は津市内に堂宇が建てられました。しかし、およそ150年後に織田信長の侵攻で焼失。その後も、信長の息子・信雄の侵略に遭うなど、多くの苦難を乗り越えた結果、現在地にたどり着い

たのです。慶長13(1608)年のことでした。この廣禪寺には、ある悲しい昔話も語り継がれています。主人公は、いつのころからか、寺の台所仕事を手伝うようになったかわいい女の子、小女良です。よく働く気立ての良い子で、近所の子ども

たちにも好かれていましたが、ある日のこと、いなり寿司を作るために炊いていた油揚げをつまみ食いしてしまいます。「かんにんして…」と謝る小女良に対して、方丈さん(住職)は敢えて強く叱りません。すると、走って逃げる小女良から長くて大きな茶色のしっぽが…。小女良は、本当は山に住む狐だったのです。何とか山の近くまで戻った小女良でしたが、運悪く、狛師に鉄砲で撃たれてしまいます。ぐったりとした姿を見て、叱ったことを後悔し、哀れに思った方丈さんは、寺の中に小さな塚を建て、手厚く葬ってあげたのです。

「今も小女良稲荷として祀っていますよ」と案内してくれるのは、廣禪寺住職の武内宏道さん。納骨堂の傍らに小さな祠が建ち、赤い幟がはためいています。「定期的にお参りに来る人もいますね」と、奥様の麻起子さんが教えてくれました。お二人によると、この話は市民には馴染み深く、平成2(1990)年に旧上野市(現在の伊賀市)の市制施行50周年を記念して発行された民話集「こじょうぎつね」のタイトルになり、掲載された30話の中で最初に紹介されています。また、地域の民話の会が、祠の前で朗読会などを開催することもあるといい

ます。小女良稲荷を大切に祀る同寺では、小女良狐のおみくじも人気です。毎月運試しを兼ねて購入したり、友人へのお土産にする人もいます。かわいくおみくじが並ぶ様子を目にしながら、「もしかすると、この中に変身した小女良が紛れ込んでいるかも…」と空想するのも楽しいひとときでしょう。



小女良狐のおみくじ

お問い合わせ

龍谷山 廣禪寺
TEL 0595-21-0657



小女良稲荷の祠



小女良稲荷の御朱印



伊賀組紐のお守り



夏には願い事が書かれた短冊を付けた風鈴が境内を彩る。※

平治の靈魂を供養する
聖徳太子ゆかりの名刹
太楽山上宮寺
阿漕平治
〔津市乙部〕



白砂の美しい阿漕浦



阿漕塚にある平治像

昔、津の阿漕浦は神宮の神饌を捕るため禁漁とされていたが、平治は病気の母のために密かに漁をしていました。やがてそれが発覚して平治は捕らえられ、簀巻きにして海に沈められてしまい、悲しんだ母も亡くなります。その後、阿漕浦にはすすり泣くような声が聞こえるようになり、哀れんだ人々は、浜の近くに「阿漕塚」を立てましたと、孝行息子の悲しい物語として知られる阿漕平治の伝説は、これを元にして世阿弥の作といわれる謡曲「阿漕」や浄瑠璃「勢州阿漕浦鈴鹿合戦」などがつくられています。また、寛政9（1797）年に成立した「伊勢参宮名所図会」では、阿漕浦の物語

として平氏の平次盛が神宮の御贄漁を妨害して捕らえられたと書かれています。阿漕平治の物語には、実は重要な後日談があることで、伝説ゆかりの上宮寺の住職・清水谷博祇さんにお話を伺いました。上宮寺は、推古2（594）年、聖徳太子が23歳のとき建立されたという古い由緒を持つ名刹ですが、天正8（1580）年、織田信包の安濃津城築城の際に現在の位置に移るまで、阿漕塚のある場所に伽藍があったということです。「応永25（1418）年に、当時將軍だった足利義持が宿泊したという記録が残っていることから、かなり大きい寺院だったと思います。土御門帝の御代（在位1198～1210）ですから源平の合戦の後のことですが、その頃まだ平治の怨念が残っていて、毎年命日の頃には網を引く声が聞こえること恐れられ、また疫病が流行して亡くなる人も出たそうです。阿漕平治というのは、阿漕に住む平氏であったそうで、その



雨宝童子像

る雨宝童子の像を当寺にもたらしたというのです。この像は、今も経石とともに当寺にあります。慶長5（1600）年の関ヶ原の乱の際、津でも起こった戦乱で炎に包まれた痕が残るいたわしいお姿ですが、毎年、8月16日の平治の命日には「阿漕平治保存会」の方たちと、阿

漕塚にこの像を安置して法要を行っています」と、かわいなお顔立ちの雨宝童子の像に、長い歴史のさまざまなできごとが折り重なっているような、不思議なお話を語ってくださいました。上宮寺には、享保8（1723）年に記されたこの物語についての文書「太楽山阿古木略縁起」も残されています。阿漕浦の浜は白砂も美しく、青い海は爽やか。今は怨念も晴れ、穏やかに明るい伝説のふるさととなっています。

お問い合わせ

太楽山上宮寺
TEL 059-1227-6021



「阿漕塚」



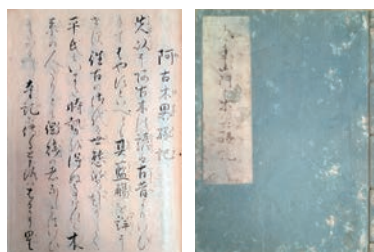
上宮寺



上宮寺の本堂内



経石



「太楽山阿古木略縁起」

雌雄の龍に守られた古刹 龍池山 松尾観音寺

二ツ池の龍

【伊勢市楠部町】



本堂の床に現れた「撫で龍」

伊勢市の「倉田山公園」は、市街地にもかかわらず木々が茂り深山の趣です。ここにある大きな二つの池が、龍がすむという「二ツ池」。勾玉を二つ巴の形に置いたような形で、東の池には雄龍が、西の池には雌龍がいるといわれています。

この池の南西、小高い丘の上に、創建

1300年という古刹、龍池山 松尾観音寺があります。日本最古の厄除け観音、縁結びの観音様として全国から参詣の人が絶えません。

石段を上がると、文政3(1820)年に建立された本堂が見えます。屋根瓦にも観音経の文字や龍がかたどられた総檼造りの荘厳なお堂ですが、五色の幕

が張られ、扉は開かれていて、参詣者を温かく迎え入れてくれます。「本堂の扉は開けておいて、なるだけ近々とお参りしていただくよう心がけているんですよ」と話してくださったのは住職の木造隆誠さん。「奈良時代のはじめ、和銅5(712)年に行基上人が当寺を開かれ、ご本尊や脇侍の3像を自ら彫られたとき、龍の伝説は既にこの地にあったそうです。それから700年ほど経たぬ永10(1403)年、本堂が火災にあったとき、池の龍が現れて、雄龍が仏像を守り、雌龍が水を吹きかけて火を消した、と伝えられています。ご本尊の十一面観音菩薩様と脇侍の毘沙門天様と地藏菩薩様は、今もここでお祀りしていますが、確かに焼けた痕が残されています。今も私どもでは毎月、池にお供え等を持って行き、お勤めをしているんですよ」と、伝説との関わりを

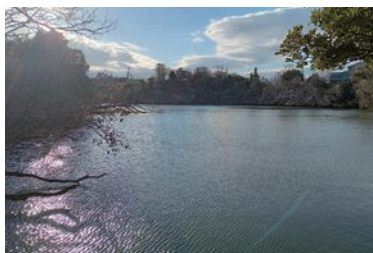


観音経の文字が象れている瓦

語ってくださいました。

ご本尊と脇侍の二体の仏像は、秘仏として御前立ちの十二面観音像(平安時代の作)の背後、二重扉の奥にお祀りされていますが、12年に一度、午年にだけ開帳されるそうです。

この本堂の床下には龍のうろこと伝わるものが安置され、天井には天井板を一枚外した龍の通り道が開けられているなど、龍にまつわるさまざまな物や言い伝えが残っていますが、最近では、本堂の床に龍の姿が浮かび上がり話題となっています。平成17(2005)年に本堂の床を張り替えた際に発見され



東の池



本堂(手前)



本堂の中に掛けられた古い絵馬



龍の形に刈り込まれたツツジ



「聖観音堂」

たもので、ケヤキの板2枚にまたがって現れていて、参詣の人たちに「撫で龍」と呼ばれ、パワースポットとして評判を呼んでいるのです。本堂の中に掛けられたたくさんの古い絵馬は、多くが江戸時代のもの。鮮やかな彩色で精巧に描かれたものが多く、人々の信仰のあつさが伝わってきます。現代は、龍の描かれた五角形の絵馬と、五色のかわいい丸い絵馬が授与所にあり、黄色は金運、赤は結婚や



丸い絵馬が縁を結ぶ

恋愛運…と色ごとにさまざまな願いのご縁を結んでくれるのだとか。龍づくしの本堂を出て奥に向かうと、体をくねらせた龍の姿に刈り込まれたツツジが植えられ、さらに奥の鳥居の並ぶ先には、宝を授けるといふ聖観音をお祀りする「聖観音堂」や鎮守の「松尾龍池社」が続きます。

お寺を出て坂を下り池のそばに行くと、池は静まり返り、今にも雌雄の龍が水から顔を出しそうです。

お問い合わせ

龍池山 松尾観音寺
TEL 0596-22-2722

吉事には白い汗、凶事には黒い汗をかく

堂の山薬師堂

汗かき地蔵

〔志摩市大王町〕



柔和な表情の汗かき地蔵

の山」があります。石段を上った小高い丘には地蔵堂のほか薬師堂、庚申堂が並び、市指定有形文化財である薬師如来座像や由緒ある地蔵が鎮座。この地域の「祈りの丘」となっています。

事が起こりました。村人は奇妙な祟りだと恐れて過ごしているうち、雨風にさらされた石像は、地蔵の形が表れてきました。村人は堂の山に祠を建てることにしました。そして大漁や豊作になると、この地蔵は白い汗をかき、反対に地震や津波、また不漁や不作のときには黒い汗をかいて村人へ予告するようになったのです。それ以来、一層大切にこの汗かき地蔵を守ってきました。

毎年2月24日の



好漁場を控えた漁業の拠点、波切漁港

志摩半島の東端、大王崎に位置する波切は古くから漁業が盛んな町。漁港からほど近い桂昌寺前に、汗かき地蔵を祀る「堂

寺が管理し、祭りや祈禱などの法事は三か寺の住職が一緒に勤めるのが慣例となっています」と「波切氏仏教会で堂守の浜口吉輝さん。汗かき地蔵と親しまれている霊汗地蔵菩薩は、天文年間（1532～1555）に漁師の惣左衛門の網に掛かったものと伝わっています。惣左衛門が海から引き上げた石像に、浜で遊んでいた子どもたちが悪さをすると、その子は熱を出したり、足が腫れたりと思しき出来

「汗かき地蔵祭」では、海上安全、大漁満足、家内安全、家業繁盛、交通安全などを祈願して読経が行われ、波切コミュニティセンター前の通りには露店が並びます。近くの大慈寺では河津桜がちょうど見ごろとなり、花見客も訪れています。



「汗かき地蔵祭」での読経※

思案地蔵は、江戸時代末に起きた「波切騒動」で亡くなった人々を供養するため、当時の仙遊寺の住職によって発意されたものです。騒動の内容は諸説あり、真相は定かではありませんが、『大王町史』によると、天保元（1830）年、御城米を積んだ船が大王島沖で遭難し、漁民が沈んだ船から米を持ち帰ったことから事件となり、14人が処刑されてしまい、その犠牲者を弔ったのだと伝わっています。

鎌倉時代作の寄せ木造りとされていますが、平安時代後期の様式も見られ、志摩地域の仏教信仰を考える上でも注目されています。また制作時期の異なる面脇侍の日光菩薩・月光菩薩、それに十二神将が従い、堂内には厳かな雰囲気漂っています。

この薬師堂の正面に懸かる鰐口も市指定有形文化財で、江戸時代の万治2（1659）年に制作されたものです。作者は安濃津を拠点に活躍していた鋳物師・辻重種で、兄の吉種とともに津市岩田橋の擬宝珠をはじめ、多くの作品をつくった人物です。



正面に吊り下げられた鰐口



首を傾げた思案地蔵



薬師堂に祀る本尊の薬師如来座像



大日如来石像

お問い合わせ
TEL 0599-72-3174
「波切氏仏教会」

※印の写真は取材先から提供していただきました

鎌倉時代のものと伝わる小さな守り仏

井田観音

海からきた観音さま

【紀宝町井田】



年に2回ご開帳される井田観音※

や貴人が寄り来るといふ伝説が数多く伝わっていますが、この観音もその一つです。

美しく整えられた敷地に、高野槇が手向けられた地蔵尊の祠や、白塗りの木造の堂宇があります。お堂は安政3（1856）年に建立されたもので、堂内にはご本尊の井田観音が祀られています。この聖観音像は鎌倉時代の作とされて



集落入り口の石柱

七里御浜沿いに続く国道42号から、道の駅「紀宝町ウミガメ公園」付近で山側の集落へ入ると、「井田聖観世音」と刻まれた大きな石柱が立っています。そこ

す。壁に掛けられた「船絵馬」は幕末頃の作品と思われ、船主が航海の安全を祈願し奉納したものです。ほかにも堂内は絵画や漢詩、版画などで埋め尽くされ、人々に親しまれてきた様子を物語っています。

また昔から厄落としの観音として知られ、3月最初の午の日を初午とし、男女厄年の人がお参りし、観音様にご開帳されます。戦前までは、近在からの参詣者や喜捨を求める巡礼者が参道に列をなし、また大道芸人や露店も出て賑わっ



参道の「巡礼坂」

たそうです。参道に残された巡礼坂という呼び名から、往時をしのぶことができます。

ご開帳の機会は一年に2度。もう1日がお盆前の8月9日です。この日を「観音さまの日」とし、先祖の霊をなぐさめ、供養の盆踊りをします。これは江戸時代から続く伝統ある行事で、やぐらを囲んで「やっさのせ」「甚句」そして「いろはくどき」の音頭に合わせて、珍しい「ほうき踊り」も披露されます。シュロのほうきを手に、輪になって、太鼓の音とゆったりとした音頭に合わせて踊りますが、これ

ら続く伝統ある行事で、やぐらを囲んで「やっさのせ」「甚句」そして「いろはくどき」の音頭に合わせて、珍しい「ほうき踊り」も披露されます。シュロのほうきを手に、輪になって、太鼓の音とゆったりとした音頭に合わせて踊りますが、これ

ら続く伝統ある行事で、やぐらを囲んで「やっさのせ」「甚句」そして「いろはくどき」の音頭に合わせて、珍しい「ほうき踊り」も披露されます。シュロのほうきを手に、輪になって、太鼓の音とゆったりとした音頭に合わせて踊りますが、これ



手水横に4体の地蔵



西家の敷地内にあるお堂



堂内は自由に参拝できる



奉納された大きな「船絵馬」



8月9日の「ほうき踊り」

いて、正嘉2（1258）年、観音信仰のあつかった侍の西忠次が、夢のお告げによって海岸で発見し、一家と村人の守り仏にと自分の家で祀ったことにはじまります。忠次は村人のために悪人を追い払い、貧しい人を助け、苦しむ人を救い、村で親しまれた人物だったようです。西家に伝わる文書によれば、その後460年を経た正徳年間（1711～1716）、西忠三郎の代に堂宇を建立し、一般の参詣者も訪れるようになりました。病氣や災害から守ってくれると、霊験あらたかな観音に多数の信者が集まり、また毎月18日の観音の日にはこののほか参拝も多く、敷地内に暮らす西家が堂守として、先祖代々大切に、ご本尊を引き継いできました。

堂内の祭壇には高野槇が供えられ、格子戸の中に高さ27センチ程の金箔をほどこした聖観音が安置されています。正面の立派な篇額には「なみまよりうかびたまひし 観世音 げにありがたや誓ひたのもし」と、由来が刻まれています。

は田畑の虫追いが発祥です。害虫を追い払うために、昔は田の水面に油を張り、竹の棒の先にワラを束ねてつくった「ぼうずり」で止まった虫を掃き出し、その所作を真似たもので、「ほうき踊り」は一時途絶えていましたが、地域の若者たちが伝統を継承しようと約30年前に実行委員会をつくり、復活させました。

普段はもの静かな下り場地区の集落で、ご開帳の日を住民はこぞって心待ちにしています。

お問い合わせ

紀宝町役場 企画調整課

TEL 0735-13310334